

日本海に近い、なだらかな山々に囲まれたの静かな町が世界遺産になったら……。地元の人々は、これまでの自分たちの生活を守る。ことと、来訪者の受け入れについて、早くからその態勢づくりと準備に取り組んできた。いままでの観光地にはない画期的な試みと、まちづくりの姿勢も魅力のひとつである。

まちづくり

世界遺産を未来に 引き継ぐまちづくり

西村幸夫

世界遺産は誰の ためのものか

よく知られているように世界遺産は人類共通の宝として、世界のために各国が責任を持って守る遺産である。

しかし、遺産の保存のために、遺産が所在する地域が幾分か犠牲を払わないといけないような場合には、どう考えたいのだろうか。たとえば、保存のための厳しい制限が地域社会を立ちゆかなくさせてしまうようなものであったらどうか。おそらくそのような保存策は本末転倒であろう。また、世界遺産に登録されることによって観光客が押し寄せ、それまでと地域の雰囲気も社会経済構造も変わって

しまうとなると、それもまた大問題である。

とりわけ、大森や温泉津のように伝統的な集落の構造そのものが貴重な文化的価値を有しているような場合には、問題は集落のあり方そのものに関わる本質的なものとなる。集落成立の基本的要因そのものが変質しかねないからである。

こうした問題はいずれこの観光地も名前が知れ渡って来るにつれて直面せざるを得ない問題ではある。とりわけ世界遺産の場合は登録による社会的インパクトが大きいうえ、世界遺産への登録理由が従来の単体としての文化財や記念物の範疇を超えて複合的なストーリーを形成しているため、これまでにない視点で地域の評価がなされる場合があり、それが問題をさらに困難にしている。

たとえば、石見銀山の場合、核となる銀鉱山の遺

跡のみならず、鉱山を守った中世の城郭、鉱石や製錬された銀、さらには山での生活物資を運んだ港と港から鉱山へ通じる街道、鉱山町や港町がセットとして登録されているので、全体を統括するシステムを評価するといった視点が重要になる。

このなかで港として挙げられているのは古くからの湯治場で、のちには北前船の基地ともなった温泉津のほか、より古い時代の小規模な港の集落である鞆ヶ浦と沖泊である。このうち温泉津は規模は小さいとはいえ来訪者を迎え入れる仕組みを持った町であるが、鞆ヶ浦と沖泊はこれまで外部との接触をほとんど持たないままたくの小集落である。ここに観光客が押し寄せたらどういことが起きるだろうか。心配ばかりが頭をよぎる。

これまで歴史を活かした独自のまちづくりを一九



鉱山遺物のほとんどは自然の中に消え
込んでいく。そのまま放っておくと、
緑に覆われていくので、草刈りや清掃
が必要で、清水谷製錬所跡の作業
は、10、15分ほどの作業と化す。



「ふるさと学習」の中にも石見銀山学習が盛り込まれ、さまざまな体験メニューや学習プログラムが実施されている。西田小学校全生徒による矢滝城山への遠足



1993年からの本格的発掘調査開始以降、その節目ごとに地元住民や関係者にたいしてしばしば現地説明会を行ってきた。釜屋間歩付近の発掘現場にて

八〇年代から展開してきた大森のまちにとっても事情は同じである。地道なまちづくりの努力によって理解ある交流人口も徐々に増えつつあるこの時期に、世界遺産に登録されることは、手放して喜べることではなく、むしろ手づくりのまちづくり路線をおおきく揺るがしかねない大問題である。旅行者が安直な世界遺産巡り駆け足ツアーを喧伝したり、マスコミがそれを助長するような興味本位の報道をするようなことになると、事態は地元メンバーの制御を超えてしまうことが容易に想像できる。世界遺産に登録されたところに住むという誇りも現実の交通渋滞や観光公害が起きることになると霞んでしまいかねない。

世界遺産はたしかに世界の人々のものではあるが、同時にそれを守り続けることは第一義的にそこに住んでいる人々の責務となる。そうであるならば、大森や温泉津、鞆ヶ浦、沖泊の集落に住む人々にとって地域に根ざしたまちづくりと来訪者との交流とが一番良い形で組み立てられるようにすることは、地元の重大な課題となる。

そして、石見銀山の人々は、こうした課題に果敢にチャレンジしていったのである。

石見銀山のまちづくり

石見銀山の登録地区内に存在する集落のうち、大森はかつて代官所がおかれた管理運営の拠点であり、今日では重要伝統的建造物群保存地区にも選定されている来訪者の一拠点である。銀山川に並行して一列の街村状の集落で、人口は五〇〇人足らずである。

ここに観光客が大挙して押し寄せてくるようなことになると道路はパンクし、日常生活も激変してしまうことになる。

島根県大田市では、官民の協働によってあらかじめまちづくりのなかでこうした問題に対処し、石見銀山スタイルの独自のまちづくりを実践するために、公募メンバー約二〇〇人と県および市の職員からなる石見銀山協働会議を二〇〇五年六月二六日に立ち上げている。

協働会議は「石見銀山を守る」、「石見銀山に招く」、「石見銀山を活かす」、「石見銀山を伝える」という保全・活用・受入・発信の四つの分科会に分かれ、述べ七七回に及ぶ議論を九カ月わたって展開し、さまざまな成果をあげている。そのひとつに協働会議が合意した行動指針「未来に引き継ぐ石見銀山」がある。その全文は後述のようになっていく。

ここに遺跡と共に生きる地域の人々の高いこころざしとまちづくりの熱意を実感することができる。

「石見銀山行動計画」

石見銀山協働会議は、長い議論の積み重ねのすえ、二〇〇六年三月一二日に分厚い「石見銀山行動計画——石見銀山を未来に引き継ぐために」をまとめている。

『行動計画』の内容を見てみると、「守る」の項目では、「遺跡・自然・人々の調和した姿」を守るために地域ルールと関連マナーからなる石見銀山ルールを作りあげることがうたわれているほか、遺跡の維持保全活動を充実させるための仕組みが提案されている。



地域事情に即した観光客の受け入れ態勢が試みられるとともに、エリアが広く、普通の観光地とは異なる鉱山遺跡を知ってもらうためには適切な案内役が欠かせない。「ガイドの会」はその中核として活動を続ける



子どもたちによる文化財少年愛護団の活動
(写真提供:大森小学校)

「招く」の項目では、ガイド体制の充実や来訪者の誘導のためのモデルコースの設定や域内交通対策が指摘されている。

「活かす」では、自然・産業・文化・空家という地域の資源を活用するための石見銀山ツーリズムやマーケティングの推進が述べられている。

「伝える」では、石見銀山のブランドイメージを統一化しそれに沿った各種の取り組みを総合化する方策が検討されている。さらに「石見銀山を究める」として基礎的な調査研究やテーマ別の検討を進めることが盛り込まれている。

「行動計画」に沿った具体的な行動も徐々に動き始めた。

たとえば、遺跡をより深く学ぶための見学会や遺跡探索の多様なルートを探るための「銀の道ウォーク」が催されているほか、実際の遺跡の維持管理のための草刈り作業等も組織だつて行われるようになってきた。

さらに二〇〇七年四月からのゴールデンウィークには大森地区全域の一般車乗り入れを制限し、外縁部でのパーク&ライド方式を導入する社会実験が始まった。将来的には大森地区全体で私設の有料駐車場を廃止する計画だという。石見銀山方式のパーク&ライドの実験をお知らせするチラシは次のような文章で始まっている。

石見銀山遺跡は、自然との共生の中で栄えた銀鉱山であり、その産業の衰退とともに遺

跡が周囲の自然の中に溶け込みながら残っています。したがって、シンボリックなものだけでなく、一見しただけではその良さがわかりにくい遺跡です。石見銀山の価値は、遺跡とそれを取り巻く自然、そこに住む人々の調和した姿にあります。これを人類共通の「財産(たから)」として皆様とともに後世に引き継いでいかなければなりません。

そこで、わたしたちは世界遺産としてふさわしいまちに、また来訪者の皆様に石見銀山の良さを十分にわかっていたいただくために『石見銀山方式パーク&ライド』を実施します。十分な駐車場や公共交通網がなく大変、ご不便をおかけしますが、ご理解とご協力をお願いいたします。

なんと地域の深い理解に満ちた社会実験のお知らせだろう。世界遺産の審査の過程でも問題となった「わかりにくさ」を逆手にとつて、だからこそ親身になってすばらしさを伝えていこうという地元の熱意も感じることが出来る。

石見銀山のまちづくりは、世界遺産登録という、ある意味で突然降って湧いたようなありがた迷惑の大騒ぎのなかで、とまどいを乗り越え、個々人の私利私欲に拘泥することも乗り越え、住むに値すると同時に誇れるまちを保持し続けるために着実に深化しつつあるのだ。

(にしむら・ゆきお 東京大学大学院教授・石見銀山協働会議アドバイザー)

未来に引き継ぐ石見銀山

私たちの行動指針

大永六年(二五二六)、博多の豪商神屋寿禎が仙ノ山で拾った光る石。この一つの銀鉱石から石見銀山の本格的な開発は始まりました。大航海時代のヨーロッパから「銀鉱山王国」と呼ばれるほどの銀を産出し、その銀は東西世界の交流を担っていました。

かつて、人々が銀を得るために自然に対して英知を傾けたこの広大な遺跡は、今再び自然の力で元の山々に戻り、周囲の自然の中に溶け込んでいます。また、その景観は、この地に暮らす人々の生活や文化にも深く宿り、穏やかで静かな暮らしを育んでいます。

石見銀山は、遺跡自体と、これを取り巻く自然、そして人々の暮らしが一体となって価値を持つ遺跡です。地域に住む私たちが、この地を訪れる人たちが、暖かく交流し、この石見銀山を守り、そして活かしながら、ともに人類共通の遺産として未来に引き継いでいくこと、それが私たちのめざす石見銀山の姿です。

この実現に向けて、次のとおり行動します。

- 一、石見銀山の価値を理解し、伝えます。
- 二、石見銀山の価値を守り、育みます。
- 三、石見銀山の価値を活かし、高めます。

平成二八年三月 石見銀山協働会議

石見銀山協働会議の行動指針から

石見銀山 大森町住民憲章(案)

このまちには暮らしがあります。私たちの暮らしがあるからこそ世界に誇れる良いまちなのです。私たちは

このまちで暮らしながら
人との絆と石見銀山を
未来に引き継ぎます。

記

未来に向かって私たちは

- 一、歴史と遺跡、そして自然を守ります。
- 一、安心して暮らせる住みよい町にします。
- 一、おだやかさと賑わいを両立させます。

石見銀山遺跡とその文化的景観



*文化的景観…風土に根ざして営まれてきた人々の生活や生業のあり方を表す景観地